

『<sup>こ</sup>い<sup>こ</sup>う<sup>れ</sup>ど、』 山口県立山口高等学校演劇部 2022 年度上演作品

作者 山口高校演劇部

※2022 年度部員全員で出し合ったアイデアを元に顧問が脚本にまとめたものです。  
大会上演時のクレジットは山口高校演劇部作、『季刊高校演劇』では浅川美代子  
作となっています。

上演 山口県山防地区高等学校演劇発表会 最優秀賞  
山口県高等学校演劇大会 優秀賞第 1 席

作品紹介 夏休み、ある小さな神社の境内で。夏祭り準備のボランティアとして集った高校生  
男女 6 人とそれを見守る老宮司の一週間。純粋なボランティア精神で参加を決めた  
者からバイト代目当ての者まで、参加者たちの動機は様々。その一人、修は、  
かねてから思いを寄せていた女子との距離を縮めたくて参加したのであった。それ  
を知った仲間たちは修の恋の行方を肴に大いに盛り上がるが……。様々な「好き」  
の形が交錯する青春ストーリー。

登場人物 男子 4 人、女子 3 人（男子 3 人、女子 4 人でも可）

上演許可を得るための連絡先 [asakawa.miyoko.tg@m.ysn21.jp](mailto:asakawa.miyoko.tg@m.ysn21.jp)

第四十一回山口県高等学校演劇大会

上演⑪ 山口高等学校



山口高校演劇部  
作

2022.9.21 版

『恋ひ恋ふれど、』 山口高校演劇部 作

【登場人物】

前原 修 (まえはらおさむ)

岩永朱里 (いわながあかり)

清水優斗 (しみずゆうと)

中村和義 (なかむらかずよし)

岡本なごみ (おかもとなごみ)

佐倉瑞希 (さくらみずき)

天野さん (あまのさん)

若人のひめし想ひはながれしも

尽くることなき水の音と聞く

実をつけぬ花におぼゆるわが恋は

しのびたれども神や知るらむ

● 初日

8月上旬。ある小さな神社の境内。かつて集落の五穀豊穰を祈った氏神様だったが、田んぼが消え、顧みる人がほとんどいない雑草に覆われた荒れた神社である。

照り付ける太陽の下、男子三人が草引きをしている。が、手は無駄な動きを見せている。

優斗 だりー。

和義 手動かせよ。(といいながらぐったりしている)

優斗 だって、この天気だよ？あちー。

修 しようがないよ。夏だから。(やけに張り切っている)

優斗 いやいや、この暑さは異常ですよ。

和義 止まらないなー地球温暖化は。

優斗 なんでこの炎天下で草引きしてんだ。

修 それは、俺たちボランティアだから。(鼻息荒い)

和義 え、これバイトでしょ。

修 違ーう！(正義の味方のごとく)

和義 でも言ってみりや学校幹旋のバイトじゃん、これ。

修 だから、これはボランティア、地域貢献プロジェクト。

和義 バイト代出るよね。

修 「謝礼」

和義 という名のバイト代な。

修 だからやめろって。神様の前だぞ。

優斗 なんか汚いなー、そういうの。

和義 んー？

優斗 本当は金目当てのくせに「純粋なボランティア精神です」て。嘘つきは泥棒のはじまりですよ。  
和義 日本の伝統文化な。建前と本音。

優斗 純粹なボランティア精神で参加した人。  
和義 しーん。

修は手を挙げている。

優斗 嘘だね。

修 俺は、たとえバイト代がなくても、このプロジェクトに応募した！

和義 今、バイト代って言ったな。

優斗 言った。

修 謝礼。

和義 もう遅い。

優斗 それほどまでにボランティア精神あふれる人物でしたかねー修くんは。

和義 絶対に何か裏がある。

なごみと朱里が社務所の方からなごみを運んで通りかかる。

なごみ ちよつとー男子、さぼらないですよ。

朱里 全然進んでないね。

和義 そんなことない。見ろ。

なごみ 数本しか入ってないけど、草。

和義 いや、草wwwwwwくくく

なごみ 自分で笑うな。

優斗 女子はいいよな。屋内作業じゃん。

なごみ 紫外線は女の敵だから。

優斗 男だって紫外線は敵だ。同じ人間だろ。

天野 はい、みなさんご苦労様です。

天野が佐倉に付き添われて出てくる。修、途端にシヤキツとする。

天野 ちよつと休憩にしましょう。  
和義 やった！

飲み物が配られる。

天野 いやー若い皆さんに手伝ってもらって本当に助かりました。

優斗 こんなに辛いと思いませんでしたけどね。

和義 「夏祭りの準備」ってもつと楽しいの想像してた。

天野 ちゃんと、お礼はさせてもらいますよ。

和義 いつでも言ってください。

優斗 なんでもお申し付けください。

なごみ 学校の裏山にこんな神社あるって知らなかったよね。

朱里 うん。天野さんはここに住んでるんですか。

天野 いやいや。ここ何年かは時々お世話をしに来るくらいですよ。

優斗 あ、それで。

和義 もはや廃墟だよね。

朱里 ちよつと。

天野 (意に介さず) 人がいなくても、神様はいらっしゃいます。誰かがお世話をしなくては。  
修 ボランテアの原点ですね。

ひとりだけ妙に鼻息の荒い修。なんだこいつ？という視線の一同。天野が華麗にスルー。

天野 夏の大祭まで一週間、暑くて大変でしょうがよろしく願います。

天野、佐倉に介助されて去る。  
修、二人が去った方を見ている。

和義 そっち何やってんの？

朱里 社務所の掃除。

優斗 そっちも掃除かー。

なごみ 仕方ないねー。宮司さん骨折して、半年以上放置してたらしいよ、ここ。

和義 荒れ放題だよ。ほかに人いないの。

朱里 昔は地域あげて世話したって言ってた。

優斗 お参りする人見かけないもんなあ。

なごみ うん。年末年始に巫女のバイトあるじゃん。あの衣装にあこがれて申し込んだのよね、これ。

朱里 コスプレはないし、掃除ばっかですっかりでしょ。

なごみ がつかり。(男子に) あんたたち、なんでこれ申し込んだの？

優斗 そりゃバイト代でしょ。

和義 純粹に、謝礼に惹かれて。

なごみ 不純だな。

優斗 岡本さんに言われたくないな。

朱里 私は修に誘われて。

なごみ 腐れ縁だねー。

和義 良く付き合うよね。貴重な夏休みに。

朱里 私ら、マブダチなんです。

優斗 解せん。

なごみ 何？

優斗 そうまでして参加したがったこいつ（修）の気持ちがいまだ理解できん。

佐倉、戻ってきて

佐倉 そろそろ休憩終わろうか。

和義 え、もう？

優斗 まだ汗が引きませーん。

佐倉 えー。

なごみ もうちよつとあるし（飲み物が）。

和義 熱中症予防にはこまめな休憩と水分補給が重要です。

佐倉 じゃ、飲みおわたたらね。

朱里 はーい。

和義 ゆっくり、ちびちび飲もう。

修 佐倉さんは、純粋なボランテニアですね。

佐倉 え？

なごみ 部長だもんね。

和義 ボランテニア部ってまだあったん？

朱里 （和義を制して）ちよつと。

佐倉 私と、あとは引退した先輩だけ。

和義 それで助っ人募集ね。

佐倉 じゃあ、飲み終わったらまたお願いします。

佐倉、そそくさと去る。修は佐倉を目で追っている。修の様子に気づく優斗。



優斗 おい。  
和義 ん？

優斗に言われて修を見る。と、修の様子がおかしい。一点を見つめている。

なごみ 前原くん。

優斗、修の視線をたどる。

優斗 そういうことか。

和義 どゆこと？

優斗 おかしいと思ったんだよ。修が夏休みボランティアとか。

なごみ え、何なに？

優斗 修。

修 ぎく。

優斗 お前は、

修 ぎくぎくっ！

優斗 佐倉さん目当てでここにいる！

修 !!!!!

修、フリーズ。

朱里 え、え？

和義 なんだ、そういうことか。

優斗 気になって、全然仕事はかどらなかったよ。

なごみ 単にさぼってただけでしょ。

修の様子がおかしい。

朱里 修、大丈夫？

修 知られてしまったからには仕方がない。

和義 お？

優斗 おまえまさか、俺たちを始末する気か？

なごみ え？始末されちゃうの？私たち？

朱里 ちよつと、修？

修 お願いします！協力してください！（と、皆に思い切り頭を下げる）

と同時に佐倉、戻ってくる。事情が呑み込めない。

佐倉 え、協力してっつてどういうこと？

誰も動けない。

佐倉 ・ ・ ・ひよつとして、みんな辞めたいの？

修、頭を下げたままフリーズしている。

佐倉 そんなにきつかったかな？この仕事。でも自分から手を挙げたわけだし、少しだけ謝礼もあるし、そこは、

優斗 仕方がないなあ。

佐倉 清水くん？

優斗 修がそこまで言うなら、俺たち、やるよ。

和義 そうなんですよ佐倉さん。じつは俺たちきつくて正直やめたいなって思っちゃって。それを、どうやって佐倉さんに切り出そうかなーって相談してたんですけど、

優斗 このとおり、修が、ボランティア精神にあふれた前原修くんが、夏祭りに協力してくれと、頭を下げて頼むもんだから、

和義 ここは乗り掛かった舟、この荒れ果てた乙乃姫神社の復興にかける友の熱い気持に応えて、俺たち、このご奉仕、続けることにしました。

優斗 頑張ります。

優斗和義 頑張らせていただきます！

佐倉 ・ ・ ・ そう。よかった。

優斗 よし、じゃあ作業再開といきますかー！

和義 よっしゃー！

佐倉 前原くん。

修 はいっ！

佐倉 ありがとう。（女子に）こっちの続き頼めるかな。

なごみ うん。

佐倉、朱里、なごみ、社務所のほうへ。朱里、修を気にしつつ。

修、魂が抜けている。

修 「前原くん、くん・くん・くん・ ・ ・ ありがとう・がとう・とう・とう・とう」（自前エコー）・はうっ！（反

芻している）

優斗 きもいな。

和義 まったくだ。

修 ほっといて（幸せそうな声）。

優斗 みずくさいな。

和義 まったくだ。

修が二人を見ると、何とも言えない暖かいまなざしで見つめ返される。真面目なのかはたまたまふざけているのかは怪しいが、修の胸には迫るものがある。

修 ……お前ら。

ひしっ！

三人 あづー…。

暑さと気持ち悪さを拭い去って

優斗 よし。こうなったら修の恋愛成就、俺たちで全面バックアップだ。

和義 面白くなってきたな。

修 ありがとう！この恩はいつか必ず、

優斗 おっと、なんの見返りもいらないぜ。

和義 真のボランティア精神というやつだな。

優斗 いや、…男の友情ってやつよ。

修 ありがとう（泣く）。

優斗 いいか、敵を制するにはまず敵を知ることからだ。

和義 だな。

優斗 佐倉さんには彼氏はいないんだらうな？

修 いない。

和義 なぜ断言する。

修 学校帰りにそつと後をつけてたから間違いない。

和義 お前それは立派な犯罪だぞ。ばれなかったからよかったものの。

優斗 いや、それは仕方がない。

和義 え？なんで？

優斗 修は今、恋する男だからだ。俺にも経験がある。

修 お前にそんな過去が？

優斗 俺は恋心に負けて、犯罪に手を染めてしまったことがある。

修和義 ええ！

優斗 毎晩、家族が寝静まるのを待ってリビングに降りていき、罪の意識にさいなまれつつもおふくろの

修 え！お母さんの財布から現金を？

優斗 いや、スマホを。

和義 え、毎日盗んでたの？

優斗 毎晩おふくろのスマホで「らぶりー★マッチョ」を観ていた。

少しの間

和義 そうだったのかー

修 何それ。

和義 知らないの？「らぶりー★マッチョ」略して「らぶマ」。高校のボディビルチームの愛と青春を描いた

知る人ぞ知る名作アニメ！そうかー。あれ、全シリーズ見ると結構長いから絶対にギガ足りないよなー。

修 ギガ泥棒。

優斗 彼女と共通の話題が欲しくてね。

修 で、うまくいったの？

優斗 ほかのやつは「らぶマ」知らないから、

修和義 お、

優斗 彼女とのトーク、

修和義 おお？

優斗 俺が、独占？

修和義 おおおお〜

修 なるほど、共通の話題か。

和義 犯罪はだめだぞ。

優斗 中学卒業でフェードアウト。つまり、元カノとの話だけだね。

修 元カノ〜〜〜！

和義 完全にマウント取りに来てるよな。

修 恋愛上級者のオーラが見える。

優斗 (偉そうに) 佐倉さんが好きなものは何だ？

修 ・・ボランティア？

優斗 ほかにもあるだろう。

修 うーん。

優斗 よし。これは調査が必要な事項だ。

和義 メモメモ。

修 はいはい！質問いいですか。

優斗 はい、修くん。

修 一週間で仲良くなるための秘策を授けてほしいです！

和義 秘策か。

優斗 お前あるのか。

修 まず「吊り橋効果」だな。不安や恐怖を強く感じているとき行動を共にしている相手に好意を抱く。おお〜。

優斗 夏祭りボランティアにそういうシチュエーションがあるか？  
修 がっかり。

和義 「ミラーリング」。鏡のように相手をまねることで好感を持たせるテクニクだ。  
優斗 試しにやってみよう。

修 はい！

和義 俺がさりげなく真似するから、どう感じるか確かめてみる。

優斗 用意、アクション！

和義が修の真似をする。

修 好きかも。

和義 ほーらほらほら。

優斗 お前、ちよろいな。

修 先生、ほかには。

優斗 ロミオとジュリエット効果。障害があった方が盛り上がる。

修 おおー。

和義 単純接触の原理。会えば会うほど好感度がアップ。

修 素晴らしい！

優斗 ドップラー効果。相手との心の距離が音の変化で表現される。ピーポーピーポー。

修 物理で聞いたことあるやつ！そうだったのか。

和義 フレミングの左手の法則。人差し指を相手に、中指をこれと直角に恋のライバルに向けたとき、これら

に垂直に向けた親指の方向でその人の恋愛における磁力の強さがわかるといいう法則。

修 よくわかんないけど、すごいー！

恋にあこがれる男たちのバカ話は続く。

気づくと女子たちがその様子を見ている。

なごみ ちよつと男子！しゃべってないでちゃんとしてよ！

優斗 心証第一、額に汗して働け！

修 はい！

音楽。

意味もなく右往左往して働いているかに見える優斗と和義。修は猛烈な勢いで草を引く。全員が草を運ぶなどしてはける。

●二日目

翌日。照明は朝に。音楽 F.O.

朝。修がさわやかに登場。社殿に手を合わせた後、もの思いにふけている。

人の気配を察して立ち上がり、音のする方を見る。明らかに落胆の表情。

朱里 おはよう。

修 おう。

朱里 なに、今がっかりした？

修 べつに。

朱里 早いね。遅刻魔の修くんが、珍しいですねー。

修 心を入れ替えたから。神社の空気のように澄み切ってさわやかだから。

朱里 ふーん。

修 なに？

朱里 人一人をすっかり変えてしまうんだから、その力は偉大だなあ。

修 なんだよ。



朱里 佐倉さん。

明らかに挙動不審な修。

朱里 このプロジェクトのリーダーだもんね、佐倉さん。朝いちばんに来たら二人きりになれるかもしれないもんねー

修 そのような下心は、

朱里 あるよね。

修 あります。

朱里 悪かったね、私で。

修 まったくだ。

朱里 なんで私を誘ったの？

修 え、どういうこと？

朱里 お邪魔でしょう、こんなにかわいい女子がそばにいたら。

修 別に。

朱里 「前原くんといつも一緒にいる女子、かわいいね」「仲いいね。彼女じゃない？」って誤解されるかもよー

修 あー、ないない。

朱里 ひとりで参加すりゃよかったのに。

修 冷たいこと言うなよ。そりゃ、友達として相談するなら、まず朱里かなーと。

朱里 ふーん。

修 流れでカズと優斗が助けてくれることになったけど、自分から頼むつもりはなかったし。

朱里 つまり縁結び要員ですか。そうですか。

修 俺のこと一番わかってるのは朱里だし。

朱里 情けないなあ。自分で何とかしろって。

修 まあでも、女子の心理くらいは朱里に伝授してもらって、それから行こうかなーと、  
朱里 いこうかなーと、てどこへいくんじや、つての。  
修 ー未知の世界？ 二人だけの？（言つてて照れる）  
朱里 勝手に自分ワールド入るのやめてくれる？  
修 ごめんごめん。  
朱里 初めから言えばいいのに。協力してくれつて。  
修 え、なんか恥ずかしいじゃん。幼馴染に好きな女子のこと話すの。  
朱里 話してるじゃん、今。  
修 もうばれちゃったし。

間

朱里 好きなんだ。  
修 うん。  
朱里 男子がうまくやってくれるといいね。

朱里、社務所の方へ行こうとする。修、呼び止めて

修 ちよちよちよちよちよ、  
朱里 何？  
修 これだけは教えてほしいんだけど。  
朱里 何を？  
修 こういう時、女子的にはどうなの。  
朱里 どうつて？  
修 男子から告白されて、うれしいもの？

朱里 相手によるんじゃない。

修 やっぱりねー。(しょんぼり)

朱里 聞いとく。

修 え。

朱里 さりげなく、あんたのことどう思ってるか、聞いといてあげる。

修 ありがとー！このご恩はいつか、

朱里 おっと、見返りはいらさないよ！

修 俺とお前の仲だから？

朱里 うん。男と女の友情ってやつよ！

修 さんきゅ！

優斗と和義の声がする。恋の歌を歌っているようである。

朱里、去る。修のことが気になる。

優斗 おはよう！恋する修くん。

修 やめてよ、からかうの。

和義 からかってねーよ、恋する男に気合い入れてんだよ。

優斗 今日も一日頑張ろう！

優斗和義 おー！

和義 俺たちすでにゆうべ頑張っちゃったけどね。

修 どういうこと？

優斗 これを見よ。

優斗、紙を広げる。

修 これは？

和義 敵を落とすにはまず情報収集。佐倉さんの情報を徹底解析してみた。

なごみ やってくる。

なごみ 暇だねえ。男子諸君。

修 岡本さん、おはよう。

なごみ 嫌ですねー男子は。この世の半分が女ってこと忘れてませんか。  
和義 と、おっしゃいますと？

なごみ 女子の攻略に女子の意見と情報網はマストでしょ。

優斗 ということは？

なごみ 私も協力しますよ！！

優斗 そうきましたかー

和義 いやいや、これはありがたい。

修 どんどん大ごとに。

なごみ で？見せてよ、その分析とやらを。

優斗 うちの学年の女子についてピラミッド図にまとめてみました。図1が頭脳、2が性格、そして3が見た目。

なごみ いっぺん死んでこようか。

和義 ピラミッドの頂点がそれぞれのトップ。

なごみ あのねー

優斗 ちなみに岡本さんは性格と見た目でトップグループに所属しています。

なごみ 正しい分析ね。

和義 佐倉さんはすべてにおいてトップグループ。いわゆる高嶺の花ってやつな。

なごみ 前原くん、あきらめよう。

修 そんな！

優斗 いや、まだ策はある。

修 ホントに？

優斗 まずは佐倉さんの好きなことが知りたい。

和義 岡本さんどう？

なごみ わかんないのよね、彼女。まじめで静かで人と騒いだりしない。かといって陰気な性格かと言えばそうでもなし。

修 岡本さんは仲いいの？

なごみ 別に。たくさんいるクラスメートのひとり？当たり前障りない会話する同士。

和義 一番興味あることはなんだろう？

なごみ えーボランテアじゃない？

修 やっぱり？

優斗 そんなことあるかよ。

なごみ ま、そういう類の人なんじゃない？

和義 えー。

なごみ てことはよ、やっぱまじめにコツコツ仕事して好感もってもらうのが正解なんじゃない？

優斗 つまんねーなー

なごみ 相手に好かれようと無理すると、後からぼろが出て大けがするよ。

優斗 恋愛上級者のおいがする。

なごみ ありのままの自分を好きになつてくれなきや意味ないでしょ。経験談？

修 なるほど。やっぱ朱里とはちがうな、岡本さんは。

なごみ でしょー。幼馴染といつまでもつる人とは違うのよ。

修 さすがー

朱里 悪かったですね。（気づくと修の背後にいる）

修 ぎゃー！

なごみ あーあーあー、私、トイレ行ってこよっかなー

なごみ、神社の裏手から、敷地のすぐ外の屋外トイレへ。朱里、不機嫌。和義、恐る恐る、

和義 岩永さん。

朱里 ああ？（不機嫌）

修 そんなに怒らなくても

朱里 べつに（怒っている）

なごみの叫び声がする。

なごみ、飛び出してくる。

なごみ なに？このトイレ、「音の姫」ないどころか、水洗ですらないんだけど！

和義 いわゆるポットンてやつですね。

なごみ 無理！むりむり！社務所の方に行ってくる。

朱里 あ、いま故障中だよ。

なごみ えーえー！

朱里 我慢すれば。

なごみ それも無理——！

和義 岡本さん。僕に任せて。

和義、スマホを取り出し流水音を爆音で流す。

なごみ ポットン問題は解決しないでしょ！

優斗 協力するよ。

優斗、スマホでさわやかな音楽を。

なごみ そんなんしても無理！

朱里 あんたたちバカ？ほら、ついてってあげるから。  
なごみ ー！

朱里、なごみの手を引いてトイレへ向かう。  
なごみ、ふと立ち止まり、

なごみ 音の姫！  
和義 はい！

なごみ、朱里、上手袖へ消える。  
和義、大音量で流水音。繰り返している。

優斗 仕事すつか。  
修 そうだね。

佐倉、出てきて

佐倉 男子、こっち手伝ってもらえる？重くて宮司さんと私じゃあ、  
優斗 はいはい！行きます！（と、修の手を挙げる）  
佐倉 ありがとう。じゃ、二人にお願いして私はこっち（草引き）やるね。  
修 ええー！

佐倉

？

修 ……ご苦労様です。

佐倉 どうも。

未練たらたららの修を優斗が引つ張っていく。  
和義はまだ流水音を流している。

佐倉

中村くん、何やってるの？

和義

紳士の気遣いです。

なごみ、戻ってくる。

なごみ

中村くん、ありがとう。ポットンであることを忘れるほどのいい音だった！

和義

どういたしまして。

優斗

こっちにもう二人助っ人頼むー

なごみ

あ、じゃあ行きます！ 中村くん二人だって。行こ。

和義

うん。

和義となごみ、社務所の方へ。

朱里と佐倉二人だけになる。草引きながら。

朱里

ごめんねー男子があんなで。

佐倉

岩永さんが謝らなくても。

朱里

いやいや、特に修は。幼馴染としては責任感じるわ。

佐倉

なんで？前原くんいい人だと思う。



朱里 そう？  
佐倉 うん。一番に参加申し込みしてくれたし。  
朱里 うわ、それ喜ぶわ。  
佐倉 え？  
朱里 あ、いやいや。  
佐倉 岩永さんもありがとう。私、PRとか苦手で、人が集まらなかったらどうしようかと心配してたんだ。  
朱里 不純な動機のやつらばっか集まっちゃたけどね。  
佐倉 不純？  
朱里 気にしないで。  
佐倉 私、どっちかっていうと一人で黙々と作業するのが好きで  
朱里 あ、ごめん。邪魔してるね。  
佐倉 いや、じゃなくて。  
朱里 ？  
佐倉 こうやっておしゃべりしながら仕事するのも、楽しいなって。  
朱里 そう？よかった。  
佐倉 岩永さんと前原くんて付き合ってるの。  
朱里 ほーら来た来た。やっぱわかってないわ、あいつ。  
佐倉 え？  
朱里 あ、ごめん。ううん。あれは、ただの幼馴染。  
佐倉 本当に？  
朱里 うん、幼稚園から。あいつ危なっかしいから。保護者？みたいな？  
佐倉 お母さんなんだ。  
朱里 一番の友達って思ってる。  
佐倉 そうなんだ。

天野、なごみとともにやってくる。なごみは手に三方をもっている。

なごみ　ねえねえ！宮司さんがおみくじ引かせてくれるって！

朱里　おみくじなんてあつたんだ。

天野　日ごろは置いてないんですけどね、人がたくさんお参りする時期には出しておくんですよ。  
佐倉　お正月とか？お祭りとかですか？

天野　そうですそうです。

朱里　へえ。

天野　ほれ、ひとつ。

朱里　今お金ないです。

天野　バイト代からひいておくから心配せんでええよ。

なごみ　バイト代！宮司さんがバイト代って言った！

天野　さつき男の子らがそう言いよったんでね。ほっほっほ。

朱里　罰当たりな奴らめ。

天野　さあさあ、引いてごらんさい。

なごみ　じゃ、遠慮なく。

なごみ、一度神社に手を合わせてからひく。

朱里、佐倉も続く。

なごみ　大吉

朱里　中吉

佐倉　小吉

なごみ　宮司さん、これいいのしか入ってないの？

天野　いやいや。

うなだれる修を励ましながら男子が現れる。掃除道具を持っている。

和義 落ち込むなって、こんなのただの紙切れだつて。

修 二人とも吉だからそう言えるんだ。

優斗 まあまあ。しよせんおみくじなんて神社の収入源、つまりは商売だ。

なごみ 罰当たりだな。

天野 しよせん紙切れの商品、されど商売なのでお代はバイト代からたんまり引いておこう。

優斗 もーしわけございませぬ。

天野 おみくじは、未来を予言するものではない。その言葉をきっかけに自らを振り返り、行動を改めるものじゃ。

なごみ 深い。

優斗 乙乃姫神社はなんだかよそと一味違いますね。

和義 うん。夏祭りもほかと違う気がする。

なごみ よね！ 準備もひたすら掃除ばっかなんですけど。

天野 神様をお迎えるために、神社を清めるのが祭りの支度です。

朱里 お祭りの飾りつけとかしないんですか？。

天野 しますよ、明日には、ほれ、ぐるりと注連縄を張って、櫛を生けて。

なごみ そういうのかー。(明らかに落胆)

天野 夏祭りは疫病退散、虫送り、台風除けの祈願じゃからの。

なごみ え、じゃあお祭りの出店もなし？

天野 ありませんねえ。

なごみ えー。浴衣着て彼氏と綿あめ食べて花火見て。

天野 花火はあります。

なごみ ほんとに？

天野 一つだけ上げます。

なごみ

一つだけ。

天野 神様へのご挨拶として。それと、夏の景気づけに。

朱里 いきなり俗っぽくなりましたね。

天野 生きる人あつてのお宮です。人間は欲深い生き物です。

和義 特にお前。(と優斗を指す)

優斗 いや、お前。(と和義を指す)

なごみ なんだから。

朱里 あんた、欲望丸出しだから。

天野 では、仕事に戻りましょうか。

それぞれ持ち場へ。修、やる気はどこへやら、その場に居残ってたため息。

修 (溜息)

朱里 そんなにおみくじ悪かったの。

修、ポケットからおみくじを出して朱里に渡す。

朱里 げ、大凶。

修 ほかのところも読んで。

朱里 恋愛。あきらめが肝心。

修 終わった。

朱里 宮司さんが、心がけ次第だって。

修 うん。(しよんぼり)

朱里 やれやれ、ほら。

朱里、自分のおみくじを差し出す。

朱里 交換してあげる。ちよつとはマシでしょ。

修、もらったおみくじ読んで。

修 ありがとう。

朱里 (独り言) 情けないな。なんでこんなやつ。

修 ん？

朱里 別に。

修 (おみくじ読んで) 恋愛。機会を逃すな。

音楽。照明 F.O.

●三日目。

照明 F.I. 音楽 F.O.

注連縄を縋っている。社殿の掃除をする者も。

優斗 あー、今日もよく働いた。

朱里 あんたが一番働いてないでしょ。

天野 では今日は解散にしましょうか。明日もよろしくお願いします。

それぞれ挨拶をして帰り支度する。

なごみ トイレ行ってくるから待ってて。(と和義に)  
和義 おっけー。(スマホスタンバイ)

なごみ、嬉々としてトイレへ。ポットンも平気になったようである。和義、流水音。

優斗 何、その連携プレー。  
和義 ふふ。

なごみ、戻ってきて、

なごみ お待たせ。帰るか。

優斗 は？

和義 悪いけど、俺たち、こういうことだから。

優斗 いつの間に？

朱里 告白されたの？

なごみ 別にそんな、言葉なんていらぬし。

和義 ねー。

優斗 ・・何故。

和義 ふふ。吊り橋効果かな。

なごみ (小芝居) きゃー！トイレ怖い！

和義 (合わせて) 大丈夫、僕がついてるよ！(流水音)

なごみ カズくん・・

和義 なごみん♡

なごみと和義、見つめ合って笑顔を交わす。

なごみ  
というわけで、お疲れ様ー。  
和義  
おつかれ！

啞然とする者たちを残して和義となごみ、いちゃいちゃしながら帰っていく。

優斗  
まじかー。

朱里  
びっくりしたー。

天野  
神様のお導きですかねえ。

朱里  
トイレの神様の。

優斗  
俺もデートだから帰るわ。(嘘である。)

朱里  
お疲れさまー。(修と目くばせ「嘘だよね」)

天野  
ではみなさん、また明日。

朱里  
よいしょ(とバケツを)

修  
持つよ。

朱里  
いいって。

修  
こぼすなよ。

朱里  
大丈夫だってば。(社務所に雑巾バケツを片付けに)

佐倉  
(天野に)持ちますよ。

天野  
大丈夫。佐倉さんもお帰りなさい。

佐倉  
これが終わったら。

佐倉、藁のちぎれたのを掃き集める。天野、注連縄を抱えて社務所の方へ。

修、二人きりであることに気づいたようである。ポケットのおみくじを確かめて、

修  
（自分に）「機会を逃すな」。

佐倉はまだ箸を動かしている。修、やや離れたところで動きをなぞるように真似する。佐倉は気づかない。修、左手をフレミングくにしてあれこれと試す。これも佐倉は気づかない。意を決して、

修  
びーぽーびーぽー（ドブプレー効果で）

佐倉  
どうしたの？

修  
佐倉さん！！

佐倉、手を止める。

修  
佐倉さん、ずっと好きでした。

佐倉  
・・・過去形。

修  
いや、好きです。

沈黙。

修  
返事は急がなくていいから。うん、全然。ただ気持ち传达了かったっていうか、自分が。夏祭りまでがチャンスかなーって、焦って。うん。ごめん。ほんとに突然ごめん。じゃあ。ごめん。

修、これ以上ない挙動不審な姿を見せて去る。

佐倉  
・・・ごめん、て何。

朱里、戻ってくる。



朱里 ごめんごめん、待った？ あれ？

佐倉 前原くん？帰ったよ。

朱里 え？ あ、そう。

佐倉 いつも一緒に帰ってるの

朱里 家が隣同士なんで。

佐倉 そう。

朱里 え、気になる？

佐倉 いや、別に。

朱里 あ、なごみたちとは違うよ。

佐倉 え。

朱里 あれってき、「私たち付き合ってます」っていうアピールよね。これ見よがしとかき。

佐倉 そうかも。

朱里 しかしびっくりしたね。昨日までぜんぜんそんな素振りなかったのに、あの二人。

佐倉 ほんとね。

朱里 あの、じゃーってのがきっかけでしょ？スマホの。

佐倉 音の姫？

朱里 馬鹿ばかしいなれそめだねー。

佐倉 (笑う)

朱里 人の気持ちはわかんないね。

佐倉 そうだね。

朱里 あっという間に水に流されたりして。

佐倉 縁起でもない。

笑う。

佐倉 岩永さんとこんな風に話すの初めて。

朱里 だね。

佐倉 私、おしゃべり苦手で。

朱里 成績優秀な佐倉さんにも苦手なことがあるんだ。

佐倉 成績と関係ないかも。

朱里 ああ、ごめん。でも、誰でも自分で思うのとはほかの人が自分を見るのとは違うんじゃない？

佐倉 そう？

朱里 目の前に自分以外の人間が一人でもいれば、誰でも観客を前にした役者である。

佐倉 誰の言葉？

朱里 知らない。でもなんかで読んだ。

佐倉 へえ。

朱里 てことは、本来の自分でいられるのはトイレの中ぐらいってことよね？

佐倉 (笑う)

朱里 佐倉さんそんな風に笑うんだ。

佐倉 そんな風って？

朱里 なんか、かわいい。

ちよつと恥ずかしい二人。

佐倉 岩永さん。

朱里 なに？

佐倉 前原くんのことどう思う？

朱里 え、何？いきなり。

佐倉は真剣な顔で朱里を見ている。

朱里 どうって、あいつ情けないのよ、いちいち私に頼りきりでき。

佐倉 そうなんだ。

朱里 私はあなたのお母さんですか、みたいな。

佐倉 でも嫌いじゃないよね。

朱里 腐れ縁ですから。

探り合っている。

朱里 なんかつた？

佐倉 ちよつと。

朱里 なに。

佐倉 ・ ・ ・告白、ていうのかなあれ。

朱里 ・ ・ ・あーそーなんだーへえ〜

佐倉 どうしたらいいと思う。

返答に困る朱里。

朱里 佐倉さんがしたいようにすればいい、と思うけど。

佐倉 そうよね。

沈黙。

朱里 佐倉さんさ、もしも、付き合ってる人いないんだったら、OKも、ありかも。

佐倉

・・・。

朱里

あいつ真剣だし、悪い奴じゃないよ。ちょっと頼りないけど。

佐倉

よくわからないんだよね。そういうの。

朱里

大丈夫。幼馴染で一番のダチの私が保証する。

佐倉

岩永さん、知ってたの？

朱里

何を？

佐倉

前原くんが、その、

朱里

・・・うん。

佐倉

どう思った？

朱里

あー、ごめんね、ボランティアとか言って下心見え見えっちゅうか。うん。

佐倉

岩永さんは、その方がいいと思う？

朱里

その方って？

佐倉

私が、前原くんと付き合った方がいいと思う？

朱里

修は喜ぶと思う。

佐倉

友達思いなんだ。

朱里

まあね。

佐倉

岩永さんは？どう思う？

朱里

私は、うん、うれしい。

佐倉

・・・なんで？

朱里

友達として。

佐倉

前原くんの？

朱里

修の。それと、佐倉さんの友達としても。

佐倉

私も友達？

朱里

もう友達でよくない？私たち。あんま話したことなかったけど、恋バナする仲だし。

佐倉

恋バナ。そうだね。(笑って) うれしいな。

朱里 そんなに喜ばれると、なんか、照れるけど。  
佐倉 私、友達いないから、そんな風に言ってもらえるとすごくうれしい。  
朱里 自分で友達いないとか言わない方がいいって。  
佐倉 そうかな。  
朱里 だから、友達として正直に言うけど、修は悪い奴じゃないよ。  
佐倉 わかった。  
朱里 うん。  
佐倉 でも、もう少し考えたい。  
朱里 そう。  
佐倉 急がなくていいって言われたし  
朱里 返事。イエスの可能性は？  
佐倉 低いかも。  
朱里 そっかー。振られちゃうかもかー。  
佐倉 うまく断らないと。  
朱里 だね。傷つきやすいからなーあいつ。  
佐倉 そうなの。  
朱里 うん。だから、よろしく。  
佐倉 わかった。  
朱里 うん。  
佐倉 話聞いてくれてありがと。  
朱里 いえいえ。あ、一緒に帰る？  
佐倉 ちよつと寄るところあるから、また。  
朱里 うん。じゃあまた明日。  
佐倉 明日。

佐倉、去る。

朱里は明らかに安堵している。修が振られそうな状況を嬉しいと思う自分がある。ちよつとの罪悪感。おみくじを開いて、

朱里 「恋愛。あきらめが肝心。」

朱里、去る。

●四日目。

夕方。帰り支度がすんでいるようである。

修 実は昨日、告白しました。

和義 今日一日の挙動不審はそれか。

なごみ 早く言っつてよ。

修 すみません。

和義 そわそわするな。たとえ振られても顔を上げて歩け。

修 振られる前提やめてくれる？

優斗 お前、今日一日佐倉さんのこと避けてたろ。

修 なんか気まずい。

なごみ だったら告白とかしなきゃいいのに。

修 おみくじのせいだよ。

なごみ はあ？

修 (おみくじ見せて) 「機会を逃すな」

優斗 神様のせいにするな。

朱里 やってくる。

朱里 おつかれー。

なごみ 和義 おつかれさまですーー

和義 帰ろうか。

なごみ うん。

二人、いちゃいちゃしながら帰る。

優斗 一緒に帰る。付き合い始めて間もないカップルあるあるだねえ。

朱里 なに評論家みたいなこと言ってるのよ。

優斗 くそ、うらやましい。(ニコニコしている)

朱里 本音が駄々洩れてるよ。顔とは裏腹に。

優斗 ちくしょーっ！

と叫びながら優斗、猛ダッシュで帰る。天野現れて

天野 帰り際にすまんが、男手ひとつ貸してもらえんかな。

修 あ、はい。

朱里 待ってるね。

修 おう。

修、天野と社務所へ。朱里、一人待っている。

修  
朱里！

修、飛び出してくる。

修  
「いいよ」って。

朱里  
え何？

修  
佐倉さんの返事。「いいよ」って！

朱里  
え・・・。

修  
いやったあー！

修、喜び勇んで社にお礼をする。

修  
ありがとうな。相談に乗ってくれて。お前からもプッシュしてくれたんだろ。

朱里  
いや別に。

修  
これも。

おみくじを出して見せる。

修  
宮司さんの言った通り、きつかけと行動次第だな。

朱里  
そうだね。

修  
朱里にもこの恩は必ず。

朱里  
いいよ。

修  
返すって。

朱里  
いいってば。

修  
いや、友情にかけて。



修、朱里の手を取って。

修 約束する。

朱里 はは。期待しとく。

修、ぱっと朱里の手を放すと舞い上がったままご機嫌で走り去る。  
朱里、取り残されてポツリ。

佐倉、出てきて朱里としばらく視線を交わした後、

佐倉 岩永さんの言う通り、付き合ってみることにした。

朱里 そうかー、よかったね。

佐倉 喜んでくれる？

朱里 当たり前じゃん。

佐倉 本当に？

朱里 びっくりしてるけどね。あいつ、振られると思ってたから。

佐倉 良い人だから。岩永さんが言う通り。

朱里 だよね？いい奴なんだよ。頼りないけど。

佐倉 うまくいくかな。

佐倉の顔に不安がよぎると朱里は複雑な気持ちながらも

朱里 大丈夫。あれ？あいつ走って行っちゃったけど。

佐倉 向こうで待っていてくれると思う。一緒に帰ろう、って。

朱里 あー、だね！まずは一緒に。うん。じゃ、また明日！

佐倉 岩永さんも一緒に帰る？

朱里 わけないでしょ。お邪魔はいたしませんよ。

佐倉 (笑う)

朱里 (笑う)

佐倉 じゃ、また明日。

朱里 じゃね。

佐倉 修が去った方へ消えていく。

朱里 諦めが肝心。私のことじゃん。

照明 F.O.

● 五日目。

優斗 和義なごみがだらだらしている。

優斗 しかしびつくりしたな。

和義 うん。可能性は限りなくゼロに近いと思ってたから。ま、とにかく、おめでとう！

優斗 俺たちの努力が間違っってなかったってことだ。

和義 作戦は成功な。

なごみ ほとんど何もしてないけどね。

優斗 もっと楽しみたかったなあ。

修と佐倉が二人でバケツや雑巾などの掃除道具を運んでくる。

優斗 お、さっそく二人の共同作業だ。(冷やかす)

修 やめるよー(うれしそう)

佐倉 (笑顔だが表情硬く動きもぎこちない)

和義 修、友情に感謝しろよー。

修 やめろってば。(うれしい)

朱里 やってくる。

なごみ 朱里く、前原のやつでれだよ。

朱里 はは。

優斗 こいつさ、秘策を真に受けてこうやって(フレミングの左手で)「付き合ってください」で言ったらし  
いから。

修 言っていないよ。

和義 いーや、ドップラー効果もな。「びーぼーびーぼー」

修 (ぎよっ) やってないやあってない!

なごみ 修くんもついに朱里ママの元を離れましたか。

和義 感慨深いなあ、岩永さん。

朱里 ま、ね。

わいのわいの。優斗和義なごみはまだまだ修佐倉ネタで盛り上がる。朱里は笑って聞いている。  
そのうち朱里は感情がこみあげてきて立ち上がる。

なごみ どした?

朱里 トイレ。(社殿裏のトイレに向かう)

なごみ そっちはポットンじゃん。カズくん、ヘルプヘルプ。

朱里 いいって。

なごみ 聞こえるってば。

和義 ジェントルマンにお任せを。

和義、おなじみ流水音。朱里、急いで走り去る。

優斗 そんなに切迫してたのかな。

なごみ そういうこと言うやつ、絶対にモテないから。

優斗 がーん。

天野 社務所に麦茶が冷えとるよ。饅頭もあるよ。

なごみ わーい。頂きます。行こ。

和義 え、音の姫係は？

なごみ 誰もいなきや必要ないでしょ。ほら、清水くんも行くよ。

優斗 モテない。モテない。(ショックでぶつぶつ言っている)

和義 なごみ優斗、社務所の方へ。

朱里、涙を引っ込めて戻ってくる。鈴を鳴らし、ふと人の気配に振り向くと天野がいる。

天野 皆さんお茶を飲みに行ったところですよ。

朱里 天野さん。

天野 どれ。

天野、厳かなオーラを纏って拝礼する。

天野 お宮での作法はね、神様のお家を訪問する気持ちで。  
朱里 ここ（社殿）に神様がいるんですね。  
天野 いいえ。神様は、あちこちにお住まいなんですよ。  
朱里 じつとしていないんですか。  
天野 そりやもうみなさまお忙しいんです。だから、こうして呼び出すんですよ。  
朱里 そうなんですわね。  
天野 悲しいことがありましたか。  
朱里 あの「じゃーっ」という音でどっかに流れていきました。  
天野 泣き声もかき消されてよかったですねえ。  
朱里 泣いてませんよ。  
天野 廁の神様は見ておられたかもしれせんよ。  
朱里 やっぱトイレの神様っているんですか。  
天野 いらっしやいますね。  
朱里 ・・恋の神様もいますか。  
天野 もちろん。  
朱里 届かないなあ。  
天野 届きませんか。  
朱里 神様は願いを叶えてくれませんね。  
天野 神様は平等ですから。平等に、みんなの願いを叶えないんです。  
朱里 じゃあ、何のためにいるんですか。  
天野 どうでしょう。見るためでしょうか。  
朱里 見てるだけなんだ。  
天野 そして、聞かためでしょうか。  
朱里 ・・私、嘘つきなんです。

天野 (聞いている)

朱里 気持ちと反対のことばかり言ってる。

天野 (聞いている)

朱里 思ってたのと違うことになっちゃって。

天野 (聞いている)

朱里 好きな人の幸せが自分の幸せって、思ってたけど

天野 (聞いている)

朱里 そんな考え自体が嘘だったのかな、とか。

天野 あなたは嘘つきなんですか？

朱里 (頷く)

天野 でしたら今私に話していることも嘘かもしれませんね。

朱里 どうしたらいいんでしょう。

天野 神様の言葉でもいただきますか。(おみくじ)

朱里 ああ、そうですね。

天野 お代はいりませんよ。

朱里 バイト代から引いてください。

天野 神様がいらないとおっしゃっています。

朱里 天野、去る。

朱里 おみくじを引いて、読む。

朱里 「耐えてこそ花」

朱里

朱里

朱里 私はいいつの一番、の友達。

優斗 いやそれ、絶対におかしいって。

なごみ え、でも言葉とかいらなくない？

優斗 いやいや、まとめると「お願いします」「いいですよ」それだけ？

和義 俺たちだって別に、ねえ。

なごみ うん。

優斗 受け入れてもらったただけだろ。お前のこと好きかどうかは怪しいな。

なごみ もてないやつジェラシーだから、気にするな。

優斗 もてないもてない言うな。

和義 はいはい、落ち着いて。元カノの話でも聞こうか。

優斗 すぐく見下されてる。

なごみ ちよつと、ほらー前原くん落ち込んでるじゃん。あんたのせいよ。

朱里 やってくる。

和義 ちようどよかった。修、お母さんに相談に乗ってもらえ。こいつは黙らしとくから。

と、優斗を連れて和義、なごみ去る。

修と朱里ふたり

朱里 何？

修 「いいよ」だけなんだよね。

朱里 は？

修 俺がお願いして、こう、許可してもらっただけ、みたいなの。

朱里 いいじゃん別に。よかったじゃん。

修 いや、だから、本当は、俺のことどう思ってるのかなーと。

朱里 え、何なに？ 毎日好き好き言ってもらわないと気が済まない駄々っ子ちゃんであちゅかー修くんはく

修 く困りまちたねー

修 ふざけるなよ。

朱里 ・・・どっちがよ。

修 つまり、こう・・・不安なんだよ。

朱里 言ってる、リア充め。

修 なんでOKしてくれたんだろう。

朱里 いいなって思ったんじゃない？

修 彼女の気持ちだが、よくわかんないんだよね。

朱里 焦るなって。

修 好きと思われてる実感が無い。

朱里 気持ちは目に見えないからねー。

修 祭りの花火とともにはじけて消えそう。

朱里 暗いなー。女子はネガティブ男なんて嫌いだぞ！

修 (溜息)

朱里 ・・・世話が焼けるわ、まったく。

修 お前みたいなのに俺の繊細な気持ちはわからねーよ。

朱里 お前にも女の気持ちなんてわからねーよ。

修 は？

朱里 ・・・聞いてあげる。

修 え。

朱里 さりげなく、私から佐倉さんに聞いてあげてあげる。

修 朱里、さんきゅ！



朱里 「実は大嫌いなのに」って返事でも包み隠さず伝えるからね。覚悟しとけよ。  
修 それはないと思うんだけど・・・  
朱里 何よそれ、結局のろけじゃん。  
修 朱里。

？

修 いつもありがとうな。

朱里 なにそれ。改まって気持ちわるい。

修 じゃあ、ごめん。

朱里 と言われたら謝るんだ。

修 ごめん。

朱里 謝るなって。

修 どうすりゃいいんだよ。

朱里 怒るな！

●

天野、皆を伴って注連縄やら榊やらを持ってくる。

天野 さあ、あと一息ですよ。

なごみ うわあ。やっぱり厳肅な雰囲気になるー。

天野 向こうから順にお願いします。

優斗 これ二人ペアでないと難しいな。

和義 修は佐倉さんとな。

佐倉 いや、そんな。

優斗 まあまあ、佐倉さん、修と仲良くしてあげてよ。

和義 こいつ、小心だから。

なごみ はい、これ持って、そっちは二人の担当ね。

境内に注連縄が張られていく。ほかの皆が注連縄をもつて消える。

佐倉、動きが止まる。聞いたことのない強い口調で、

佐倉 前原くん。

手に持っていた注連縄を修に押し付ける。注連縄作業を終えて戻ってきた一同も目撃する。

佐倉 やっぱ、無理。ごめんなさい。

修 え。

佐倉 やっぱり違うわ。彼氏とか、無理。

修 あ。

佐倉 ごめんなさい。

優斗 え、ちよ、佐倉さん。

佐倉 絶対に無理。

なごみ 嘘でしょ、

佐倉 本当にごめんなさい。

佐倉、走り去る。

一同啞然。

優斗 なんか、気を悪くさせること言った？

気まずい空気。

修 やっぱ、大凶だったわ。

修、意外にも気丈にふるまう。戸惑う周囲。

修 あー、ごめんねーお祭り前日に雰囲気壊しちゃって。

優斗 気にすんなよ。

修 振られちゃいましたー。

妙に陽気な修。

修 やっぱあれかー。おみくじ交換してもらうとか、ずるいよね。神様は見てるよなー。

和義 修。

えーと、俺のは「あきらめが肝心」だったっけ？当たってるわ。よっしゃ、きっちり働きますかー！あ、天野さん、これ、やり方教えてください。

修、天野の方へ。天野、ポンポンと修の肩を叩いて、

天野 あっちの柵から始めましょう。

修、天野に連れられて社殿の奥に消えていく。

なごみ ひどくない？

和義 でも意外とさばさばしてたよ、修。

なごみ にしてもさあ、いったんOKしといてこれはないでしょ。

朱里やってくる。

朱里  どしたの。

なごみ  朱里、佐倉さんあり得ないんだけど。

朱里  何？

和義  修振られたよ。俺たちの目の前で。

優斗  「無理」とか、結構な言い方だった。

なごみ  気にしてないみたいなの素振りしてたけど、相当傷ついてるよ。

和義  様子見ってきてやったら？

朱里  佐倉さんは？

優斗  一人で向こうに、

朱里  修をお願い。

朱里、走っていく。

和義、優斗、なごみ、修たちが去った方へ。

ややあって佐倉、袖を持って出てくる。そのあとを朱里が追ってくる。

朱里  佐倉さん。

佐倉  もう聞いたんだ。

朱里  どういうこと。

佐倉  やっぱり無理。

朱里  何が無理なの。

佐倉  男の子と付き合うとか、やっぱり無理。

朱里  じゃあ、なんでOKしたの。断るかもって言ったじゃない。

佐倉 前原くんいい人だし、岩永さんも嬉しいって言ってくれたし。

朱里 何それ。私のせい？そんな軽い気持ちでOKしたの。

佐倉 軽いつもりはないけど。

朱里 あり得ない。あんなに喜ばせといて、崖から突き落とすみたいなこととして。修の気持ちなんてこれっぽ

つちも考えてないでしょ。

佐倉 考えてるよ。

朱里 考えてたらそんなひどいことできないでしょ。

佐倉 私、頼まれると断れないから。ボランテア？

朱里、怒りがこみ上げる。

朱里 何それ。意味わかんない。

佐倉 わからないでしょ。

朱里、何とか怒りを抑えて、

朱里 話、かみ合わないんだけど。

佐倉の言葉待つ朱里。

佐倉 試してみたかったの。

朱里 は？

佐倉 私でも男の子と付き合ったりできるのかなって試してみたかった。

朱里 何それ、嫌味？ 頭良くて、気が利いて、優しくてかわいくて。佐倉さんのこと男子は高嶺の花って呼んでるよ。

佐倉 ほら、誰も私のことなんて見えてない。  
朱里 え。

佐倉 私、そういうのじゃないから。

朱里 そういうのって。

佐倉 わからないよね、きつと。みんなすぐに誰が好きとか誰と誰がくつついたとか面白おかしくしゃべって。そういうの私は絶対に無理だから。

朱里 なんて。

佐倉 私の悩みなんて誰にもわかってもらえないし、自分でもどうしたらいいかわかんないものをわかってもらおうとも思っていないし。そのうち変わるのかもしれないとか思ってきたけど。ずっとそうなんだよ。

語気を荒らげる佐倉に戸惑う朱里。

朱里 よく話が見えないんだけど。

佐倉 なんでみんな人の気持ちにあんなに興味津々なのかな。そのくせ全然わかってないし。すぐに人に話しちゃうし、勝手に外堀埋めちゃうし、みんなから囲まれて、迫られたら断れないし。すぐにみんなに広まっちゃうから、もう後戻りできないんだって追い詰められたみたいな気持ちになるし、窮屈で、苦しくて、

佐倉、感情が高ぶっている様子。

朱里 よくわからない。

佐倉 大丈夫。わからない方が普通だから。

朱里 でもわかりたいよ。

佐倉 本当に？

朱里 うん。

朱里と佐倉、しばらく視線を合わせ続けた後に

佐倉 私は男の子を好きにはなれない。

朱里、言葉が出ない。どういう意味なのか何度も考えている。どうにか次の言葉を絞り出す。

朱里 じゃあ、いや、でも、好きでもない人の心弄んで、それで捨てるとか、酷い。私だったら例え好きじゃ

ない人から告白されても傷ついたりしない。佐倉さんのやったこと、人としてどうかしていると思えない。

佐倉 傷つけないいいやり方があったの？

朱里 あるよ、絶対に。

佐倉 好きでもない人から告白されたらうれしい？

朱里 その気持ちはありがたく受け止める。

佐倉 絶対に？

朱里 (少しひるんで) 絶対。

佐倉 どうやって？

朱里、黙っている。佐倉も朱里が口を開くのを待っている。

佐倉 じゃあやってみてよ。どう言ったらいいか、私を相手に言ってみせて。

朱里 え。

佐倉 これから、好きでもない相手から、好きだって言われるから、ありがたくその気持ちをうけとめて、それから絶対に傷つけないように上手に断ってみせてよ。

朱里 どういうこと、それ。

佐倉 (苦々しげに) 好きです。

朱里 ……

佐倉 好きです。どう？嬉しい？

朱里 (戸惑いつつ) うれしいよ。

佐倉 嘘。

朱里 嘘じゃない。

佐倉 なんです。

朱里 佐倉さん、いい人だから

佐倉 はあ？ さつき人としてどうかしてるって怒鳴り散らしたばっかなのに？

朱里 ……

佐倉 ほらね。傷つけずにいるとか無理でしょ。人の心なんてわかんないでしょ。私が人を好きになるたびに

朱里 どんなに辛いかわからないでしょ。

朱里 理解はできるよ。

佐倉 その言葉がいちばん傷つく。

朱里 そういう人もいるってちゃんとわかってるから。

佐倉 そういう人ってなに？そうやってひとまとめにしてわかったような気にならないでほしい。

朱里 わかってる、と思う(自信ない)。

佐倉 ああ、もう何言ってるんだらう。だから誰とも深くかかわらずにきたのに。

朱里、佐倉にかける言葉が見つからない。すぎるように答えを求める。

朱里 もう一回聞くけど、なんで修にいいよって言ったの？ 本当に試したかっただけ？

佐倉 岩永さんがOKしてあげてって言ったから。

朱里 ごめん。

佐倉 何にごめんなの。



朱里  
・  
・  
・

佐倉、立ち去ろうとする。呼び止めるように朱里、

朱里  
明日、

佐倉、足を止め背中であく。

朱里  
明日。お祭り来てね。

佐倉  
来るに決まってるでしょ。

朱里  
そっか。

佐倉  
私、頼まれると断れないから。

●祭り当日

朱里  
お疲れ。

修  
何が。

朱里  
何って、お祭り準備？

修  
ああ、お疲れ。

朱里  
うん。

修  
好きだったんだよね、ずっと。

朱里  
いつから？

修  
はつきりとはわからないけど、ずーっと。

朱里  
そかー。だよ。いつの間にか好きになるもんだよね。

修  
お祭りのことだけ。

朱里 え？

修 嘘ー、佐倉さんのこと。

朱里 やめてよ、めんどくさい。

修 遠くから見ただけにしときやよかったのかなー。

朱里 いっちよ前に傷ついてるじゃん。

修 まーねー。

朱里 またいい人現れるって。

修 だいたいなー。

朱里 そんなにショックだったか。

修 まーねー。

どうにも元気の出ない修。

朱里 修学旅行どうすんの。

修 んー？

朱里 修学旅行。ホームテンボスのイルミネーション、ぼっちで見るほどわびしいものないよーって

先輩たち言ってたよ。

修 お前はどうすんの。

朱里 私は女同士で騒いでるのがいいから。

修 佐倉さんもいっしょ？

朱里 どうかな。

朱里、修が見たことのない表情。気になる修。

修 なんでそんなにしょげてんの。

朱里 え。

修 お前が落ち込む要素くない？

朱里 落ち込んでないし。

修 お前さ、いちいち人の気分には振り回されてたら身が持たねーぞ。

朱里 どの口が言ってるの。(ぶつぶつ) なんもわかんなくせして

修 (遮るように) 朱里。

朱里 ?

修 いつもありがとうな。

朱里、気持ちさがこみ上げてくる。言葉にならない。

修 やっぱ、お前しかいないわ。

朱里 え？

修 好きなやつができたらずぐに言えよ。俺が全力で後押しする。

朱里 なによそれ。(泣けてくる)

修 だから、俺の気分に合わせるなって。

朱里、泣き顔を隠しながら修の肩にパンチ。大して痛くもないのに大げさに痛がって見せる修。

笑ってしまうけどやつぱり悲しい朱里。でも、いつもの二人で安心したような気も。

静かな時が流れる。おどけてみたもののやはり元気が出ない修。

朱里 辛いね。

修 うるせー。

朱里 こんなに辛いのにさ、なんで人を好きになっちゃうんだろうね。

修 ん？

朱里 人間はさ、進化してるんじゃないの？なんでこんなつらい機能？仕組み？ついてんの。

修 なぜ人は人を好きになるのかってこと？

朱里 うん。

修 ま、繁殖しなきゃ絶滅しちゃうから。

朱里 繁殖に関係ない好きもあるよね。

修 ん？ ああ、まあね。

朱里 好きになってくれない相手を好きになるって辛いね。

修 辛いばっかじゃないんじゃない？

朱里 そう？

修 なんか、ハッピーじゃん。

朱里 振られたくせに。ハッピーじゃないじゃん。

修 まあね。

朱里 知らないうちに誰かを傷つけてることもあるし。

修 俺は傷ついてばっかだな。

朱里 そうでもないんじゃない。

修 え？

朱里 なんでもない。

修 ま、一つ言えるのはさ、

朱里 何？

修 たぶん俺は、いや、人間は、傷ついても恋することをやめませんよ、ってこと。

朱里 そっか。

花火が上がる。花火の光に照らされる二人の顔。心の中で何かが弾ける。

修 おっしや！

修、社殿に駆け寄り鈴を鳴らす。

修 俺たちは、これからも、誰かを好きになりまーす！

朱里も鈴を鳴らして

朱里 わかんないけど、とにかく、生きてくーす！

大地から湧き上がるような原始のビートを刻む音楽。  
やがて社殿の奥から眩しい光が。光の中に一瞬神様の姿が見えたような気がする。  
ふざけて狛犬に噛まれてみたり、社殿に駆け上がりとする罰当たりな修を朱里が追っかけまわしたり。バカ騒ぎはさながら天の岩戸の前での宴会のように。

目に見えない生きる力に導かれたまま、幕。

END